

「らいふすてーじ」1998年3月号《教職員特集号》。

京都大学の思い出 わたしと生協

早いもので京大の門を初めてくぐってからもう丁度45年になる。その頃はまだ戦争の影があちらこちらに残っていたが、京都は外面的には何事もなかったかのようであった。しかし日常生活は大変で、皆食べることに汲々としていた。一回生は宇治のキャンパスであったが、その一番奥まったところに生協があった。世間一般に外食券というものを出さないとご飯が食べられないシステムであり、その外食券は米屋さんに配給の代わりに発行してもらうことになっていた。

大学生はどうしたかという、その頃法学部の建物の地下が学生控え室になっていて、その壁に家庭教師とかアルバイト情報とか、不要品だとかの張紙があったが、そこに「外食券あります」という張紙もあって、記憶では1食分2円であった。農家を実家に持っている学生たちが、外食券を横流ししていたわけである。そういうわけで生協の存在はありがたかった。27円を払って定食にありつくと、ピースの缶にバラで入っている巻煙草を一本買ってのむ、というような毎日であった。ピースは4円、バットは2円であった。随分食意地が張っているようにも見えようが、飢えというのは経験したものでないとわからないもので、最近のグルメ指向なるものを見聞きする度に、これがいつまで続くのだろうと、つい思ってしまう。環境がどんどん悪化し、人口がどんどん増えていくと、今に飢えがやって来るかもしれない。農業問題を真剣に考えている人も多くなり、昆虫食を研究している人さえもいると聞く。生協が生活を自分たちで守るためにあるものであるとすれば、環境の問題にこれまで以上に気を使う必要があると思う。とにかくこれが私と生協との初めての出会いであった。

京大に就職することになっていかほどか経ったとき、突然副理事長になってほしいと依頼があった。生協については安くものが買える便利なものであるという以外の知識は全くなかったので、固辞したが、諸般の事情もあって、お引き受け

することになった。これがいわば生協との第二の出会いであった。当時の理事長は理学部の佐藤文隆先生であった。引き受けたからにはということで、ホリヨークの著書を手始めに、山本秋の『日本協同組合運動史』など、手当たり次第に本を読み漁って、少しずつ生活協同組合なるものがどういうものかについての概念を得ることができた。その中で生協の始まりが1884年の「ロッヂデール平等開拓者組合」であり、日本ではそれから35年経った明治12年に始まること、賀川豊彦や詩人の渋谷定輔なども生協に関わっていたこと、生協の虹の旗の由来が、創世記の第九章にある、洪水の後にエホバがノアに「わたしは雲の中に虹をおく。これがわたしと地との間の契約のしるしとなる」といったことに因んでいること、などを知った。

学生の生活と大学の学問・研究を支援するという大学生協の役割を、いろいろな面から実際に見聞きし、学生とも始終議論して考える、という経験はその時まででないもので、シンドクはあったが貴重な体験であった。その後本務の方が忙しくなったために、生協は専ら利用する側になってしまったが、思想信条に関わりなく、自分たちで自分たちの生活を護るという理念には今も共感を覚える。生活というのは日常的なことであるから、目覚ましいことはないもないが、何をしてもしもキリというものがない。そのくせ極めて大切なものであることも確かである。だからそういう生活を護るという生協運動に携わることは、根気のいることだと思う。しかし目立たない縁の下の力持ちに徹することがとても大切であると感じるようになったのは、生協に関わったおかげであると思う。退官する今、今の専務理事の岡君達が、学生理事として活躍していた頃が懐かしく思い出される。諸君の健闘を祈りたい。

1998.2.21